

## 資源ゴミの捨て方はこれでいいのか

倉本聰氏の『北の国から』には、富良野市のゴミ廃棄について語られた一話があった。『北の国から'95 秘密』というタイトルで、宮沢りえが準主役として登場し、純(吉岡秀隆)の恋人になるドラマで、1995年6月9日にフジテレビ系列でオンエアされた。物語は純が東京から麓郷(ロコウ)に戻って来て、富良野市のゴミ回収の職についたところから始る。そこに宮沢りえが登場し、間違えて廃棄してしまった祖父の遺品である柱時計を捜しに来て、純とめぐり会う。このドラマでは日本人のゴミ問題に対する倉本氏の疑問符が、あちこちで表現されている。柱時計に始って、農家が規格に合わないからという理由で捨てたエンジン、そして最後にはゴミの中から出て来たサケの新巻1本。このドラマシリーズにあって、見ごたえのある作品だった。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

小生の住む浦和区では、可燃ごみと生ゴミを週2回、そして週1回の資源ごみ、同じく週1回の機械類や粗大ゴミの回収がある。ところがゴミを捨てに行くと、こんな物をゴミにしていいのだろうか、疑問を感じてしまうものも少なくない。ひところ多かったのはビデオデッキやスピーカーなどの音響製品であった。音楽はパソコンやスマホで聴くのが当たり前になり、スペースをとるスピーカーが廃棄されたのである。小生はスピーカーはその都度拾って来た。いや実際にはこれは拾うのではなく盗んで来たことになるらしい。廃棄されたゴミ類は全て市の財産という事になるからだ。ゴミを回収した市はこれをどう処理するのか知らないが、燃やすとなれば地球温暖化になるだろうし、埋めるにしてもかさばるばかりで、効率が悪いだろう。ところがこのスピーカーは昔風のアンプで音楽を聞いている小生にとっては、結構な宝物である。というのはデジタルでもアナログでもイヤホンで聞く音よりもスピーカーで聞く音の方がずっと自然で心地いい。しかもスピーカーの数を増やしてゆくと、小さな雑音は、音波の到達速度によるタイムラグで、耳障りでなくなることが多い。昔のアナログのレコードが、デジタルモドキに変貌するというわけである。

★                      ★                      ★                      ★                      ★

先日、毛布が2枚ビニール袋に詰められて捨てられていた。痛んでいる様子は全くない。置き場所に困ったのか、単にいらなくなって捨てたのか、とにかく拾ってきた。小生は3.3リッターのワンボックスカーに乗って、カメラをドッサリ詰め込んで、あちこちに写真撮影に行く。毛布はこの際の梱包材になるばかりか、いいクッションになる。と同時に、ちょっと膝に巻けば、寒さをしのげるメリットもある。2013年3月2日、北海道湧別町で、吹雪の日に父親とその娘が、軽トラックで雪の吹き溜まりに突っ込み、行政の不手際もあって、父親が凍死する事件があった。父親が娘を抱きかかえて寒さから守り、自らは亡くなった痛ましい事件である。小生はこのとき毛布と防寒着、それ

とスコップが積んであったら命は助かったのではないかと悔やまれてならない。クルマはガソリンさえ十分にあって、吸気と排気出来る状態になっていればエンジンは動く。10分ごとに車を少し前進させて排気口を確保し、少しバックして吸気口がうずもれないようにすれば、エンジンは止まらないし、防寒着と毛布があれば、親子で身を寄せ合って、寒さに耐えることもできたであろう。ガソリンがなくなったら、雪の中にすっぽり埋まって室内の換気さえ確保できれば、雪は布団の役割を果たしてくれる。小生はその昔キャンピングカーに乗って、猫とあちこちで夜を明かした経験から、車の中には必ず毛布を積んでいる。それともう一つ真夏でもフード付の革ジャンパーをシートにかけてある。革は雨にも耐えられるし、火の粉が飛んで来てもすぐには着火しない。小生の長いドライブ経験から得た結論で、この他にも殺虫剤や、かゆみ止め、常備薬、石鹸、ハサミ、ナイフ、フォーク、スプーン、割箸、爪楊枝、筆記用具、懐中電灯、マスク、クーラーボックス、ペットボトル、ガムテープ、孫の手、軍手、乾電池など、1日クルマの中で暮らせる程度の物が積んである。どんな危機にあっても、まず1日辛抱できれば、今の日本では必ず救援が来ると信じているからである。

★ ★ ★ ★ ★

ところが昨今の社会では、身の回りで邪魔になったものは何でも捨ててしまう。植物でも動物でも時には人間や我が子でも……。しかし我々の祖先である縄文人は、どんな物にでも命があると信じており、物を大切にしたい。三内丸山古墳からは土器のカケラが一箇所から大量に出土した。土器が使えなくなったとき、彼らは祈りを捧げた後、そこに葬ったのである。小生は現代人もこれに見習うべきではないかと考えている。すべてのものに寿命はある。しかし寿命を終わってからでも利用価値があるものも少なくない。例えば医学の発展のために献体するようなもので、いわば最後の仕事である。小生は年齢のせいもあって、かつ垂直頸椎であるために肩がこる。このためしばしば肩や腰にシップ薬を貼付してしのいでいる。このシップ薬をはがした後、この粘着力で、飼っている猫の毛だまりを貼り付けて取る、衣服に付いた猫の毛を、これで取ると洗濯するより手際いい。シップ薬の最後のご奉公というわけである。

★ ★ ★ ★ ★

小生の考えでは機械類等の不燃ゴミでもまだ使えるものは、別な置き場所を設けて、使いたい人に持って行ってもらう仕組みを作るべきではないかと思っている。そうすれば資源は活かされ、それだけ地球温暖化も防げるはずである。見た目はホコリまみれでも、まだ使えるものは別に置き場所を設けておけば、拾う方も拾いやすくなる。このことが一部の人の利益になると、廃棄物が活かされて、温暖化が少しでもくい止められるなら、その方がどれだけプラスになることだろうか。

小生は1943年の戦中生まれであるから、物のない時代に育った。着る物も履く物も食べる物もなかった。親からも物を大切にすることを教えられて育った。何でも

修理して使うことを学び、自分なりに工夫して修理することを覚えた。物を拾うことを恥ずかしいことだとは思わないし、むしろ使えるものをやたらと捨てることは恥ずかしいことだと思っている。縄文人と同様に、命ある物を無闇に捨てることこそ罪悪だと考えているのである。

★ ★ ★ ★ ★

それと小生は木製のものは出来るだけ拾ってくるように心がけている。木工用の工具は電動工具から金槌、ドリル、ノコギリ、カンナ、ノミまでほとんど揃っているから、ちょっとした小鳥の巣箱や犬小屋ぐらひは、時間さえあれば作ることが出来るし、その昔はベッドや家具までも、部屋のサイズに合わせて、自分で作ったものだ。一番難しいのは塗装で、これをうまくやるには相当の経験と乾燥過程でホコリが付かないような場所が必要で、最も困難な作業だったことを覚えている。今では水溶性の塗料や、速乾性の塗料も多くなり、随分と楽になったが、とにかく塗装は根気のいる作業で、何回もペイントしないと綺麗に仕上がらない。しかし捨ててある木工品は既に塗装されており、大きさがうまく折り合えば、部材としてすぐにでも使えるものも少なくない。木は生き物である。生命を人間に捧げて家具や種々の道具として利用されてきた。それを人間の都合でやすやすと処分されてはたまらないだろう。薪ストーブがあれば、ここで燃やして最後のご奉公をさせてあげたい所である。

★ ★ ★ ★ ★

その昔日本に永住しているヨーロッパ人が、日本人は何でも物を捨ててしまう国だと嘆いていたことを思い出す。彼はその捨てられた物をこまめに拾って来て、すべての家具を揃えてしまったと言って、自宅の中まで見せていたのを思い出す。ヨーロッパは必ずしも資源の豊かな国々ではない。木材も乏しいし、石油化学製品も輸入した原油から作る。日本の使い捨てるの習慣は、戦後物資が豊かだったアメリカから移入されたものである。アメリカの大量生産は、確かにコストも安く、石油も石炭も鉄も豊富なアメリカにとっては、新たなカルチャーであったに違いない。しかしこのカルチャーは日本にもヨーロッパにもそぐわない。だからヨーロッパでは頑丈で、いつまでも修理して使う文化が根付いている。クルマや電化製品そして陶器やガラス器さえも、カケラを持参すれば同じものを作ってくれる。

★ ★ ★ ★ ★

そして倉本氏の北の国からを思い出す。彼は1935年生まれで、小生より8年先輩になる。しかし今の人間の物を大切にしない心を憂えて、この物語の中に富良野市民の資源廃棄とゴミの回収に関して、触れたのだろう。物を大切にする精神は、他人の心をおもんばかる精神とどこかで繋がっているように思える。物を大事にする子供は他人をいじめることもしないだろう。物を粗末に扱う精神は命をも粗末にし、他人の心を踏みにじる精神にも共通しているように、小生には見えるのである。